LIBRA SQUARE

Cinema 心に残る映画

『友だちのうちはどこ？』

1987年／イラン／アッバス・キアロスタミ監督作品

感動を誰かに伝えたい衝動と上手く表現できない困惑と

私が，初めてこの映画を見たのは，10年以上前のことだ。時間つぶしのために早稲田にある名画座に入った時，偶然，上映されていた映画だった。何の期待もなく見た映画だったが，その後，私の中でこの作品を越える映画は存在していない。いまだに，年に何度も，自然とこの映画のことが思い出されて，映画に溢れるやさしさ，奥に隠れた鋭さ，深さを，かみ締めている程である。とにかく，すごい映画である。しかし，そのすごさを説明するのは，難しい。上手く言葉にならないが，あえて，2点挙げてみることとする。

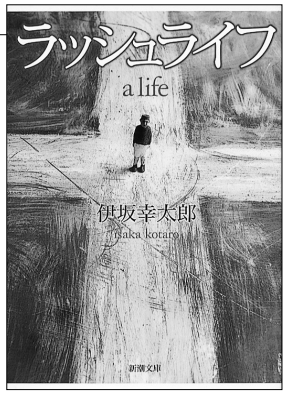
まず，この映画のすごいところの1つ目。「すべてが自然であること」である。およそフィクションとは思えない。私の目と登場人物との間に，カメラという存在があることが，信じられない。観客は誰も，自分がイランの路上に立ち，普通に生活している人々を，道すがら観察しているような錯覚に陥るに違いない。

すごいところの2つ目は，「簡素ゆえの深さ」である。ストーリーは，単純である。主人公はイランの小学2年生，アハマッド君。小学校で席が隣のネマツァデ君のノートを間違えて持って帰ってしまう。ノートを返すためにアハマッド君が，ネマツァデ君の家を探す，というだけの話なのである。話が簡単な上に，主人公の子供のセリフは，ほとんどない。音楽もない。無駄な脚色は一切ない。しかし，主人公のセリフが少ないため，子供の表情・しぐさがセリフ以上に語ってくる。無駄がない分，我々は，よけいに登場人物に注目するのだ。そして，子供の純粋さに感動し，同時に映画の裏に見え隠れする鋭さ，深さを，しみじみ感じるのである。

以上，抽象的にぼんやりと説明するばかりで，具体的に何がすごいのか，お分かりいただけなかったことと思う。この映画のすごさを，口や文章で表現することは難しい。とにかく，見てください，というしかない。そして，この映画を見た人は，余りの感動を誰かに伝えたい衝動に駆られることだろう。しかし，その感動を上手く表現できない自分に困惑すること，間違いなし，である。

（会員　多田津 雪）

Book 最近，おもしろかった本



『ラッシュライフ』

伊坂幸太郎 著　新潮文庫　660円（税込）

5つの視点で構成された“だまし絵”パズルを解く感覚で読み進める

本書は，伊坂幸太郎の２作目の著書である。この物語は，東北の仙台を主な舞台とし，「金で買えないものはない」と言い切る画商と，女性画家，著者の他の作品にも登場する泥棒，新興宗教の教祖に傾倒する画家，互いの配偶者を殺害しようと計画する不倫カップル，失業中の男性という５つの視点ごとに話が進行していく。これらの５組の人間達の話は一見全く関連ないように展開していく。もちろん，全く無関係のままで，終わるわけがないので，どのように関連していくのだろうと先が気になりながら話を読み進めていく。すると，本の終盤になり，それぞれの話の関連性が明らかになっていくのだが，この関連性にはあるトリックがもちいられているため，「なるほど，これがこうなるのか」と感心してしまい，以前の場面に戻って読み返したくなってしまう。この時の感覚は，パズルが解けていくときのようであり，この物語全体がだまし絵を構成しているといえる。

このようにまずは，その構成の巧みさにひきこまれていく。しかし，この物語は，それだけでは終わらない。登場人物のそれぞれの人生をみていると，どのような人生が幸せなのだろうかについて，神に対する考え方についてなど，ありふれたテーマではあるが，考えさせられた。

そして，それぞれのストーリーが収束していくその結末では，失業し再就職先が見つからず，人生に絶望している中年男が人生への希望を取り戻していく。ここでの金が全てと考える画商とのやりとりの場面では，読んでいて爽快な気分になった。

本の題名の後のページには，「ラッシュライフ」この「ラッシュ」の読み方をする英単語がならんでいる。登場人物の人生がどの「ラッシュライフ」にあたるのか考えながら読むのもおもしろい。

文庫本で450ページほどの本であるので，短い話ではないが，物語の世界に引き込まれ，ほぼ一気に読んでしまった。ぜひ一読をおすすめしたい。

（会員　山崎 哲）